



八木重吉の神戸における居住地と詩作活動に関する調査報告（資料紹介）

山形, 梢

(Citation)

國文論叢別冊, 2:1-14

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491571>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491571>



■資料紹介

八木重吉の神戸における居住地と詩作活動に関する調査報告

山形 梢

はじめに

八木重吉は一九二二（大正十）年から一九二五（大正十四）年まで、神戸・御影で暮らした。二三歳のとき東京高等師範学校を卒業、兵庫県御影師範学校の英語教師として赴任した地で本格的に作詩を始める。後に結核のため二九歳で夭逝する重吉にとって、神戸での四年間は、仕事の傍ら作詩を始め、私生活においても恋愛、結婚を経て二児に恵まれるという人生の充実期であった。

生前に刊行された唯一の詩集『秋の瞳』（富士印刷株式会社出版部、一九二五年）が代表作として知られるが、この再校の際に重吉が書きとめた覚え書に「此の集に収めたる詩は、大正十一年秋より大正十三年秋頃迄、約二ヶ年（二十五才より、二十七才までの間）につくられしものなり（中略）、大正十年頃のも僅少あり¹⁾」とあるように、本詩集に収載された百十七篇はすべて神戸時代の作である。

本稿では、作詩の土台となる神戸時代の実生活について、特に居住地に着目して詩人像を探る。既存の年譜（田中清光編『八木

重吉文学アルバム』筑摩書房、一九八四年）では、四カ所の居住地が伝えられている（表1）。しかし、「御影町石屋川（申御田九五四）」という記載は二カ所の居住地情報を混同しており、正しくは「御影町石屋川」と「申御田九五四」は別の場所である。したがって、居住地は五カ所あったと考える。

表1 年譜にみる重吉の居住地（田中清光編『八木重吉文学アルバム』より作成）

一九二二（大正十）年四月	武庫郡住吉村山田の柴谷米助方に下宿
一九二二（大正十）年二月	武庫郡魚崎町下松原八番屋敷松風館内に移る
一九二二（大正十）年七月	御影町石屋川（申御田九五四）の新しい借家で結婚
一九二三（大正十二）年三月	武庫郡御影町柳八五一の借家に移る

本稿では、重吉の神戸時代の居住を、以下の八つの資料から推定していく。

〔資料1〕年譜（田中清光編『八木重吉文学アルバム』筑摩書房、一九八四年）

〔資料2〕重吉の日記（草野心平他編「日記」、『八木重吉全集第

三卷』筑摩書房、一九八二年)

〔資料3〕重吉の島田とみ宛書簡〔草野心平他編「島田とみ宛書簡」〕「編注」、(『八木重吉全集 第三卷』筑摩書房、一九八二年)

〔資料4〕吉野登美子の回想(吉野登美子『琴はずかに―八木重吉の妻として』彌生書房、一九七六年)

〔資料5〕吉野登美子と清水嗣子の私信

〔資料6〕旧一万地形図『御影 大正十二年』(大日本帝國陸地測量部・国土地理院、一九二三年)

〔資料7〕前田慶三編『阪神沿道地籍図 西部』(後藤印刷工所、一九二〇年)

〔資料8〕前田慶三『魚崎町・住吉村・御影町全圖 紳士富豪の御別邸附記』(前田工務所、一九二二年)

島田とは吉野登美子の旧姓であり、登美子(とみ)は、重吉の歿後に詩人の吉野秀雄と再婚した一九四七年(昭和二年)以降は吉野姓と名乗った。島田とみは、重吉が東京高師を卒業する直前(一九二一年三月)に一週間の家庭教師をした十六歳の女性であり、重吉は神戸に赴任後に彼女への思いを募らせる。神戸から東京の島田とみに宛てた書簡は一九二二(大正十一)年、婚約後(二月)から結婚(七月)までの間に集中的に交わされ、現存しているのは一月九日から三月二日のものである。以下の引用文で、引用元を記載しないものは『八木重吉全集 第三卷』〔資料2・3〕に拠る。

1 住吉村山田の柴谷米助方

一九二一(大正十)年四月、重吉は神戸に赴任した。最初の下宿先は「兵庫県武庫郡住吉村山田柴谷米助方」であることが、島田とみ宛書簡〔資料3〕で示される。山田は現行の町名でなく、伝統的な地区名である。当時の住吉村山田は、住吉川の溪流を生かした水車小屋が立ち並び、酒造業のための精米が盛んな農村であった。当時の旧一万地形図『御影』〔資料6〕から、山田地区のうち当時住宅のあった場所は限定的であり、現在の神戸市東灘区住吉山手四丁目付近であると考えられる(図1)。

職場である御影師範学校までは徒歩で二五分ほどの坂道である。冬の夕暮れ、仕事を終えた重吉が、六甲山に続く長い坂を登るときに見た御影の風景と、重い足取りが描かれている。

東の方を遠く眺めやったときに、夕闇に、電燈が、さびしく、きらめいてゐた。そして、星も無い、寒いくれ方、私は、こうして、一人、とほとほと、宿に、今は、かへつて来たのでした。(一九二二年一月十八日書簡)

さむざむと／山茶花のさく／御影のまちを／とほとほとゆく
——(同年一月十九日書簡)

下宿は高台にあり、二階にある部屋の窓からは、大阪湾越しの大阪の山なみや瀬戸内の島々を見わたせたことが記されている。神戸の山手らしい美しい眺望である。初めての教員生活の日々に、

重吉はこの海の風景を心の拠り所としていたようだ。

淋しいとき、つらい時に、いつも癖にする様に、そつと、障子を開いて、海にみいった。冬ざれの空気は、痛いほど澄んで、海を越して、向ふ側の、大阪の山々にも、まっ白い雪がふるえてゐた。淡路島が氷り付いてみえる。鳴戸海峡の二つの大きい島と、二つの小さい島とが、ぼつねんと、黙って、浮かんでゐた。(同年一月十九日書簡)



旧一万地形図『御影』(1923年)

【図1】「住吉村山田」の住宅地域

冬の六甲山麓には六甲嵐が吹き下ろす。寒さと坂道がよほど耐えがたかったのだろうか、下宿を移ることを一月三十日の書簡で記している。

今日行って、大体きめて来た。多分二月のはじめから引きうつる筈、海岸にずっと近いところで、普通の下宿屋です。洋館作りだけれど、……見たほど立派な内部でも無かった。中は、やはり日本間の様になってをつた。外によいのが無いので、まあ一時でもと、そこにきめて来た。いづれ引き越したら番地お知らせする。ともかく、これからは、当分学校宛にしておいておくれ。(同年一月三十日書簡)

山手ではなく、海に近い場所に転居先を求めたのだろう。納得のいく転居先ではないにもかかわらず転居するという固い意志がみられる。住吉村山田は、四月から約十ヶ月間の住まいだった。

2 魚崎町下松原八番屋敷松風館内

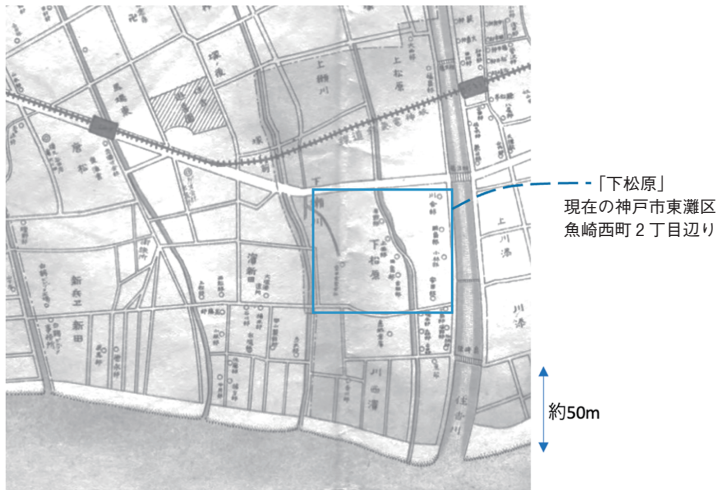
重吉は一九二二(大正十一)年二月二日、「魚崎町下松原八番屋敷松風館」に転居した。下松原は現行の町名ではない。書簡には「海まで半町位」とあるが、海岸から半町(約五五メートル)は下松原地区ではないため、実際には海岸からもう少し離れた、現在の神戸市東灘区魚崎西町二丁目あたりと推定される(図2)。御影師範学校へは約二十分で、通勤路は坂道ではない。

あ、云ふことをすっかり忘れちゃってをつたけれど、今日

此の宿へ引き越して来たのです。あひにく雨が降ったので弱らされた。『こんなとき富ちやんがをつてくれたら』——などと、そんなことを考へた。否、富ちやんと一所になったら、もう、こんな下宿住ひもせないだけだね。松風館つて云ふ下宿屋です。けれど、あまり大きいのぢやなくて今は他に二人しかをりません。愈々もつて、下宿屋といふ奴は、家庭味の少ないものだ。(同年二月二日書簡)

この転居当日の書簡から、下宿名が松風館であったことがわかる。住吉川周辺が古来「雀の松原」と呼ばれる松の景勝地であったことを想起させる。海に近い立地を選んだが、この和洋折衷住宅らしい建物の二階部屋からは海は見えなかった。高台ならどこからでも見える海だが、海に近づくくと建物に遮られ見えなくなる。代わりに六甲山を一望できるのが神戸の海側の眺望である。

富ちやん、御影の後ろの六甲山脈にも、雪が、嶺につもつて、冷々と、そそり立つてみえます。此の宿からは、余り海が近いので、海は見えずに、山が見えます。海までは半町位です。「智者は海を愛す、仁者は山を愛す、」こんな文句が何かにあった様に覚えてゐますが……とにかく、海には、動中静ありといった様な感がひそんでをるし、山には静中動ありといった風な深い感じがあります。僕は「自然」といふものに、耐らない、愛着を感じます。富ちやんは如何？(同年二月四日書簡)



前田慶三『魚崎町・住吉村・御影町全圖：紳士富豪の御別邸付記』(1921年)

【図2】「魚崎町下松原 八番屋敷松風館」の推定地域

松風館での暮らしは重吉にとつて、あまり満足なものではなかったようだ。婚約者と離れて暮らす寂しさが短歌に詠まれている。

「富ちやん」と写真に呼びびて／答へなき宿の二階の／夜のしじま（沈黙）よ（同年二月八日書簡）

さらに書簡にはこの下宿の環境への不満が記されている。転居前は「見たほど立派な内部でも無かった」、転居初日は「下宿屋といふ奴は、家庭味の少ないものだ」、その後も「下宿屋ずまひの悲哀さには、相も変わらぬ、まづい飯をくわされて、相も変わらぬお婆さんの御給仕！」などの記載が続き、重吉はおよそ一ヵ月半で次の転居を決めている。

此の手紙着いたとき以後に出さる、富ちやんの手紙は「松風館」宛てにして下さい。更るつもりだけれど、それは、すぐでなく、又変更したので、とにかく、帰省迄は、もとの下宿にをる故。（同年三月十八日書簡）

この「帰省」とは学期末休み（三月二七日）に上京して島田とみと会う約束を意味している。本当はすぐにでも転居したいと準備を進めていたが、転居を帰省後に延期したことがうかがえる。

3 御影町申御田九五四

一九二二（大正十一）四月以降の島田とみ宛書簡は現存せず、日記にも申御田への転居については明確な記載がない。だが、年譜（資料1）に記載された「武庫郡御影町申御田九五四の借家」は当時の地図（図3）によって、現在の「神戸市東灘区御影本町二丁目十二」に該当することが特定できる。御影師範学校へは約

五分の立地である。

この当時の重吉については、御影に住んでいたことを記憶する人物の証言が残っている。原田健氏の取材記事（一九七七年）によると「御影時代の重吉は、阪神御影駅のすぐそばに住んだが、その家は一〇年ほど前火災で焼け、今は駐車場になっている。当時隣家で同時に家主だった長谷栄介氏（略）は、『八木さんは借家住いの前、一時わたしの家に下宿されました。色の白いほんとうにおとなしい方で、よく油絵を描いていらっしやいました（略）と語っている』と記されている²⁾。また、天利武人氏が一九八八年に御影を訪れた際の記録には、『長谷栄介さん（中御影区民会会長）の案内で、重吉が独身時代住んでいたという、アパートを訪ねた。四軒の長屋の一番手前の部屋だそうだが、その部屋だけがつぶされ、駐車場になっていた』との記載がある³⁾。このように、独身時代の重吉は、四軒の長屋の一番手前の部屋に住んでいた。建物は一九七〇年代に火災で焼失し、現在（二〇二三年時点）も駐車場がある。

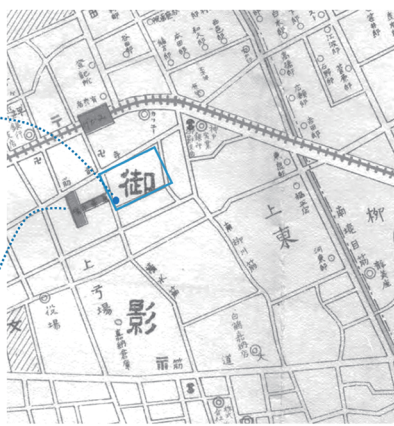
地図（資料8）からは、当時の重吉の住居は阪神御影駅に近く、向かいには廉売市場があったことがうかがえる。一九二二（大正十一）年の日記（日付不明）に、線路に近く人の往来でにぎわう部屋で一人、離れて暮らす島田とみへの思いを募らせる短歌があるが、この借家で詠まれたものであるとみられる。

きみあらぬ／この室さびし／きみがこえ／こゝにきこえず（日付不明）

やかまし馬力の／ひびき／けたたましい／阪神電車！（日付不明）



前田慶三編『阪神沿道地籍図：西部』（1920年）



前田慶三『魚崎町・住吉村・御影町全圖：紳士富豪の御影邸付記』（1921年）

【図3】「御影町申御田九五四」の場所

婚約者との結婚は二年後、島田とみが女学聖学院を卒業後という約束だったため、重吉は彼女と会えない境遇を憂いていた。ところが急遽、結婚が前倒しすることが決まる。嫂が結核で死去し、兄の家の家事を引き受けた島田とみは、女学校と生活の両立の忙しさで同年五月に肋膜炎に罹り、重吉は急ぎ上京、御影へ連れて療養させ自分の手で教育すると言って島田とみの兄を説得したのだ（資料1、一八二頁）。六月以降、妻を迎える覚悟や期待が、海に重ねて記されている。地図から、申御田の家から海（御影浜）までは六分程度の距離であり、しばしば訪れていたとみられる。

きみよ来よ波もしづかにこの海の／都のひとを迎ふに似たるは（同年六月十一日）

七月の真昼の浜はなまめきて／きみあらばわれきみを抱かんと（同年七月十四日）

同年六月の日記を検証すると、「家借らんと、あつきひるころあるけば／貸す家あらずふときみをおもへり（前後の日付より六月二三日と筆者推定）」との記載がある。新婚生活に備えて家探しをしていたようだ。転居の記録はないが、日記の「私は、／毎日 毎日／南無阿弥陀仏／南無阿弥陀仏」と／念じ 念じて／さも倦かぬ／宿の／婆さんが羨しい！（七月四〜九日）の「宿の婆さん」は申御田の下宿、「朝する物の響はとなり家の／豆煎るだにも哀しとはさく（七月十四日）」の「となり家」は新しい借家を指しているとするれば、その間に転居したと考えられる。

4 石屋川の借家

一九二二（大正十一）年七月十九日、重吉は十七歳の島田とみを東京から神戸に迎えた。結婚後の重吉の日記・短歌は残されていない。新婚の家は、年譜〔資料1〕では「御影町石屋川（申御田九五四）の新しい借家」と記載されているが、申御田九五四は先述の下宿である。

関茂氏は「重吉とみ子は、はじめ、町の郊外に近い石屋川に一戸を借りた」と述べ、二人の暮らしぶりについて「六畳、三畳、それに四畳半が二間、広い台所つきという家であった。重吉の勤務先、御影師範学校に行くには、海岸に向かつて、町通りをだらだらと降りてゆくということになる。とみ子の買い物もそうであった」と伝えている。家からは職場も市場も離れているとの情報から、申御田九五四と石屋川とは立地が異なるとみるべきである。吉野登美子の回想〔資料4、六〇頁〕にも「御影町の石屋川とよばれる高台」に家があったことが記されている。

八木は御影町の石屋川とよばれる高台の小さな借家に、二人の愛の家を構えようと本棚と机と寝具と行李だけを持って引越してきていた。その家へ私たちは着いた。そこには米と味噌、釜と鍋、それに少しばかりの食器が用意されているだけだった。家主の奥さんに教わって揃えたときいて、私たちは顔を見合わせて微笑し合ったのである。（中略）市場はずっと下った町にあり、師範学校の横を通っては買物にいった。

さらに、とみの私信にも「阪神と阪急電車の丁度中ほどの少し小高い所」との記載がある。

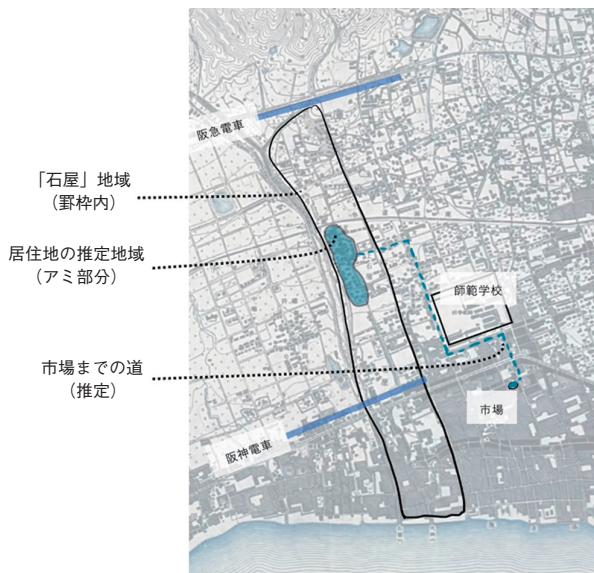
石屋川は阪神と阪急電車の丁度中ほどの少し小高い所でした。六十年前の事とて、余りに変わり一寸説明しにくひですね。御影の詩碑除幕式に行きました時でさへ変りようがひどくてびっくりいたしましたのよ。（資料5）一九八五「昭和六十」年十二月

これらの「阪神と阪急電車の丁度中ほど」「師範学校の横を通っては買物にいった」との記述から、居住地は御影町の大字「石屋」エリアのうち、地図（図4）印部分の住宅地範囲に絞られると考える。このあたりは石屋川の自然堤防で小高い地形になっている。御影師範学校へは約十三分、廉売市場へは十五分の距離である。この石屋川での生活は幸せに満ちていたことが吉野登美子の回想〔資料4、六三頁〕からうかがえる。

夾竹桃とポプラと柳の多い町で、町の背には六甲山の山並みが朝に夕に色を変えて、とても美しかった。夕食後に私たちはいつも散歩に出かけた。海へ向う白い道を、二人は肩を並べて歩いたものである。茅渚の海！なんと想い出ふかいびきをもった名であろう。ときによつては山の方へ登つてゆくと、まもなく松林があった。ここでは石屋川は水が涸れて細いせせらぎとなって流れている。いちめんに月見草が咲いていた。山は紫色に染まっている。その川のとおりで八木に歌

えといわれては、シューベルトのセレナードや讚美歌などを歌うことがあった。静かな夕暮の松林に金色の光が流れ、歩いているのは私たちだけ、それは文字どおりの天国であった。私にとってこれほど無心に幸福に浸っていた時期は、なかったとおもう。

石屋川沿いの「海へ向う白い道」は幕末に徳川道として整備さ



旧一万地形図『御影』(1923年)より作成

【図4】「石屋川の借家」の推定地域

れ、大正期にはハイキングコースとして使われた。現在も松林を残している。石屋川の家は推定地域から御影の浜までは約二十分である。「茅渚の海」は大坂湾の古称で、御影師範学校の校歌にも使われている言葉である。東京から来たばかりの島田とみ吉、重吉に海の名を教えられ、それを「想い出ふかいひびき」として長く後年まで記憶にとどめていたものと思われる。⁵⁾

5 御影町柳八五一の借家

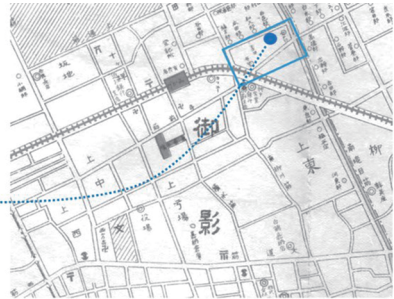
一九二三(大正十二)年三月、御影町柳八五一の借家に移る。現在の神戸市東灘区御影中町一―二―十七である(図5)。天利氏の記録に(筆者注…長谷氏の)お姉さんが昔、重吉の住む借家をやっていたという。独身時代の重吉が登美子さんと結婚し、狭いだろうからといって、その借家から柳の借家に引っ越して頂いた³⁾とあり、申御田・石屋川・御影町柳の住まいは長谷氏の世話を受けたことがわかる。

吉野登美子は「やがて数学の先生が四国へ転任されるということが起き、その空いた家へ私たちが入居できることになった。学校にも近く、阪神電車に近い下町の、柳という静かなところであった。(中略)これまでの石屋川は山と町の中ほどにあつたので、買物に町へ出るにはかなり時間がかかったが、柳は市場に近くて助かった」と回想している(資料4、七一頁)。第一子の出産を二ヵ月後に控え、広さと利便性を求めているの転居なのだろう。市場や御影師範学校へは約五分の立地である。同年五月には長女桃子、翌年十二月には長男陽二が誕生する。

この二階建て二軒長屋(図6)での生活について「わが家は、



前田慶三編『阪神沿道地籍図：西部』（1920年）



御影町柳八五一

前田慶三『魚崎町・住吉村・御影町全圖：紳士富豪の御別邸付記』（1921年）

【図5】「御影町柳八五一」の場所

門を入り細い格子戸を開けると女関が三畳、奥に八畳間、三畳の台所と広い土間、それに井戸がある。二階が三畳と六畳の二間つづきで、八木の勉強部屋になっており、壁には八木の描いた絵が飾られ、窓辺に机と本箱があるだけの簡素な部屋であった。この部屋で八木は本格的に詩ひとすじに進み出すのである。（中略）結婚を期に詩だけを書いてゆく決心をした、といっていた」（資料4、七二頁）、「家へかえると、まず好物のあまいココアを一杯のみ、それから二階へあがって、日記をつけるように詩を書くのが、日常のならわしでした」との記述がある。

同年四月以降、この部屋で、重吉は千百を超える詩を生み出す（表2）。書きためた詩は、画用紙に表紙を付けてリボンで綴じら



【図6】御影町柳の借家

（田中清光編『八木重吉文学アルバム』筑摩書房、1984年、32頁）

【表2】神戸時代に作られた詩群

	詩群	作詩時期	構成
	[習作断片]	1922年6月から同年末までと推定	148編
1	詩集 感触は水に似る	1923年に編集 (1921年に作詩)	詩25篇
2	詩集 夾竹桃	1923年に編集 (1922年に作詩)	詩17篇
3	詩集 龍舌蘭	1923年に編集 (1922年秋に作詩)	詩10篇
4	詩集 白い咲笑	1923年に編集 (1922年秋に作詩)	詩17篇
5	詩集 虔しい放縦	1923年に編集 (1922年秋に作詩)	詩39篇
6	詩集 矜持ある風景	1923年に編集 (1922年秋から冬に作詩)	詩22篇
7	詩集 不安な外景	1923年に編集 (1922年末から1923年初に作詩)	詩12篇
8	[断片詩稿]	1923年初と推定	詩3篇
9	詩集 庭上寂	1923年に編集 (1922年秋から1923年初に作詩)	詩12篇
10	詩集 巨いなる鐘	1923年	詩12篇
11	詩集 静かなる風景	1923年	詩11篇
12	詩集 石塼と語る	1923年	詩21篇
13	詩集 私は聴く	1923年	詩17篇
14	詩集 暗光	1923年	詩11篇
15	詩集 壺	1923年	詩8篇
16	詩集 草は静けさ	1923年	詩20篇
17	詩集 土をたたく	1923年4月	詩18篇
18	詩集 痴寂なる手	1923年5月20日	詩40篇
19	詩集 焼夷	1923年6月	詩37篇
20	詩集 丘をよちる白い路	1923年8月24日	序文1篇、詩31篇
21	詩集 鳩がとぶ	1923年9月28日	詩37篇
22	詩集 花が咲いた	1923年10月18日	序文1篇、詩27篇
23	詩集 大和行	1923年11月6日	序文1篇、詩20篇
24	詩集 我子病む	1923年12月9日	詩27篇、散文1篇
25	不死鳥	1924年1月1日	詩25篇
26	詩集 どるふいんの うた	1924年1月20日	詩11篇
27	詩稿 幼き怒り	1924年4月7日	詩51篇
28	詩稿 柳もかるく	1924年4月15日	詩48篇
29	詩稿 逝春賦	1924年5月23日	詩51篇
30	●詩●鞠とふりきの独楽	1924年6月18日	「憶え書」1葉、詩57篇
31	[欠題詩群 (一)]	1924年10月	詩96篇
32	[欠題詩群 (二)]	1924年10月	詩109篇
33	神をおもふ秋	1924年10月26日	詩76篇
34	純情を慕ひて	1924年11月4日	詩73篇
35	幼き歩み	1924年11月14日	詩53篇
36	寂寥三昧	1924年11月15-23日	詩44篇
37	貧しきものの歌	1924年12月9日	詩57篇
38	詩稿 ものおちついた冬のまち	1925年1月14日	詩82篇
39	詩稿 み名を呼ぶ	1925年3月	詩63篇
	[断片詩稿]	1924年秋-25年3月までと推定	詩4篇

17以降 (1,137篇) が御影町柳の借家で作られた (草野心平他編『八木重吉全集 第一巻』(筑摩書房、1982年、402-405頁)、『八木重吉全集 第三巻』同、450-455頁より作成)

れた。この時期の作品については、今井克佳氏が「わずかに妻と幼い娘のみが、詩人の世界に住んでいたのである（略）小さな家族との世界に籠もり、詩に没頭する生活が、神戸の、御影時代の重吉の姿なのである」と指摘するように、詩からは御影町で暮らす家族の日常が浮かび上がる。

やなぎも かるく／春も かるく／赤い 山車には 赤い兒
がついて／青い 山車には 青い兒がついて／柳もかるく／
はるもかるく／けふの まつりは 花のようだ（「柳もかるく」初稿…「詩稿」柳もかるく）一九二四年四月十五日、「秋の瞳」一九二五年）

これは御影の春季例大祭（だんじり巡行）を描いている。弓弦羽神社によると当時の祭は四月十四・十五日に開催されていた。次の詩は、近所の御影浜で一歳四カ月頃の桃子と過す様子を描写出している。

わが兒と／すなを もり／砂を くづし／濱に あそぶ／つ
かれたれど／かなし けれど／うれひなき はつあきのひる
さがり（「わが兒」初稿、欠題詩群（二）一九二四年十月、「秋の瞳」一九二五年）

家族以外との関わりについて、田中清光氏は、「交友はあまり多くなく、限られた教師仲間や教え子、高師時代の友人、広島高師に入學した弟鈍一郎氏等が、時たま訪れる程度の静かなくらしたっ

たとい⁹」と解説しているが、実際に家に招かれたという当時の教え子の証言が残っている。

訪問時の様子について、門脇清氏は「僕は殺風景な寄宿舎から逃れて八木先生の家をおとづれた。壁には赤ちゃんの下に詩を書いた紙がはってあった。先生は二階の一室にどてらを着て一心に勉強して居られたらしい。隅には沢山な絵が顔を並べて居る。床には簡単な本棚に本がしづい顔してくすぶっている」と回想している。また、藤原正司氏は、「門脇君に誘われて、在学中柳のお宅へおうかがいしたことがあるが、『夫人の像』という先生の描かれた油絵があったことと、その時ココアを頂いて、私には生まれて始めてのココアが大へんおいしかった記憶がある」と証言している。重吉は家族の姿を、詩だけでなく絵にも描き、自宅の壁に飾っていたという。重吉の絵画作品としては、御影を描いた油絵として「六甲山を望む」（一九二二年作）、「御影の白い路」（一九二二年作）、御影師範を描いた「赤い建物」（一九二三年頃）の三点が現存している。

このような神戸生活は一九二五（大正十四）年の春に慌ただしく終わりを迎える。三月に千葉県の柏に新設された東葛飾中学校への転任が決まり、一家は柏へ転居した。二年間の住まいとなつたこの家の跡地には現在（二〇二三年時点）駐車場がある。

おわりに

重吉の作詩活動の土台となる生活基盤として居住地を調べたところ、神戸時代の四年間で五カ所の居住地があることがわかった。各位置を当時の地図上に示す（図7）とともに、神戸時代の重吉



旧一万地形図『御影』（1923年）より作成

【図7】当時の地図でみる重吉の居住地

の動き（居住地の変遷、島田とみとの関係、次への転居理由、創作表現の変化）を表3にまとめた。以下、改めて転居の経緯を整理する。

- ① 住吉村山田…初めての冬を迎え六甲山沿いの寒さと通勤の坂道がつらく海側へ転居。
- ② 魚崎町下松原…下宿の環境に不満があり転居。
- ③ 御影町申御田…市場や電車の音に不満、結婚に備えて静かで風景の美しい町外れに転居。
- ④ 石屋川…新婚生活を楽しむが、妻の妊娠を機に広さと利便性を求め転居。
- ⑤ 御影町柳…二児が誕生、作詩を本格的に開始、転任により千葉県へ転居。

ここから浮かび上がるのは、生活者としての詩人像である。居住環境に対して一定のこだわりを持つ感受性や、短期間で転居を実行する行動力の高さが見受けられる。学生時代の親友である宮治武氏は重吉について「全く意地張りで意志の強さに於ては何人と雖も敵すまい」と述べており、また、結婚も八木家からの勘当もいとわぬ「重吉の強引な独走」であったように、自身の要求に正直に一途に行動する性格は居住地選びにもみられる。

さらに、居住地の変遷から、詩人誕生の軌跡を見ることができ、神戸時代は島田とみとの関係性によって「独身期（居住地①②③）」「新婚期（居住地④）」「育児期（居住地⑤）」に分けられ、ライフステージに合わせて創作表現も変化している。独身期には島田とみにのめりこむように書簡・日記・短歌が多数書かれ、新婚期には作詩の芽生えがあり、これらの文学的修練や創作力が結

【表3】神戸時代の八木重吉（居住地の変遷、島田とみとの関係、転居理由、創作表現の変化）

時期	居住地	島田とみとの関係	次への転居理由	創作表現の変化
① 1921(大正10) 年4月～	武庫郡住吉村山田の柴谷米助方(下宿)	独身期 同年9月に書簡で愛を告白、1922年1月に婚約(結婚は2年後との約束)	冬を迎え六甲山沿いの寒さと通勤の坂道がつらく海側へ転居	日記と夥しい短歌が書かれる。それにまじって僅かな詩と短篇習作が書かれる
② 1922(大正11) 年2月～	武庫郡魚崎町下松原八番屋敷松風館内(下宿)		下宿の環境に不満があり転居	婚約以降(1～7月)は毎日のように書簡も書く
③ 1922(大正11) 年4月～	武庫郡御影町申御田九五四(下宿)		市場や電車の音に不満、結婚に備えて静かで風景の美しい町外れに転居	
④ 1922(大正11) 年7月～	武庫郡御影町石屋川(借家)	新婚期 同年7月19日に島田とみを神戸へ迎える	妻の妊娠を機に、広さと利便性を求め転居	詩を書き始める
⑤ 1923(大正12) 年3月～1925 年3月	武庫郡御影町柳八五一(借家)	育児期 同年5月26日に長女桃子が出生、1924年12月29日に長男陽二が出生	千葉県立東葛飾中学校への転任により、千葉県へ転居	作詩を本格的に開始し、詩を自編した手製の小詩集を作り始める

田中清光編『八木重吉文学アルバム』を参考に作成

実して、育児期には作詩の波が爆発的に押し寄せた。

重吉は千葉転居の翌年に病臥し、その翌一九二七年に死歿する。歿後五十年、「御影時代こそ、私たちの生涯で一番幸せな時でございました」と吉野登美子は振り返っている。詩人の原点かつ頂点ともいえる神戸生活は、本稿で紹介した資料のほかはほとんど謎に包まれており、重吉が暮らした痕跡は神戸市立御影中学校の校地の一角（御影師範学校の跡地）に石碑が一つあるのみである。今回、書き残された文章と地図から居住地の特定を試みるも、神戸市東灘区は戦災・震災を経て街が変わり、住所表示も変更しているため、居住地の特定は難しく推定にとどまった。しかし、重吉の詩には、まぎれもなく百年前の神戸・御影の風景と、そこに暮らす幸せな家族の姿が刻まれている。詩人の理解につながる神戸時代に関する資料のさらなる発見が期待される。

・各資料を提供してくださった小林正継氏（八木重吉の詩を愛好する会会報）、清水嗣子氏（吉野登美子氏との私信）、神戸大学文学書史料室（御影師範学校卒業記念アルバム）に感謝申し上げます。

注

- (1) 草野心平他編『八木重吉全集 第一巻』（筑摩書房、一九八二年）
- (2) 原田健「阪神文学散歩―東神戸編七」（『阪神サンケイリビング』一九七七年四月十五日）
- (3) 天利武人「八木重吉の住んだ御影町を訪ねて」（『いっぽほんのみち 八木重吉の詩を愛好する会会報』二二号、一九八八年）

(4) 関茂「八木重吉―詩と生涯と信仰」（新教出版社、一九六五年、四〇頁）

(5) 御影師範学校卒業記念アルバム（一九三三年）

(6) 八木重吉の詩を愛好する会「全国のゆかりの地」[URL] <http://yaginako.com/ゆかりの地/>

(7) 吉野登美子編『八木重吉詩集 花と空と祈り』（彌生書房、一九八五年、二四二頁）

(8) 今井克佳「神戸の八木重吉」（『神戸と聖書―神戸・阪神間の450年の歩み』神戸新聞総合出版センター、二〇〇一年、九四―九六頁）

(9) 田中清光「解説」、草野心平他編『八木重吉全集 第一巻』（筑摩書房、一九八二年、四二二頁）

(10) 門脇清「八木先生の思出」（『いっぽほんのみち 八木重吉の詩を愛好する会会報』三二号、一九九〇年）

(11) 藤原正司「ツイインクル、ツイインクル、リッツルスター 八木重吉先生のこと 御影時代の重吉の思い出（四）」（『いっぽほんのみち 八木重吉の詩を愛好する会会報』二九号、一九八九年）

(12) 田中清光編『八木重吉文学アルバム』（筑摩書房、一九八四年、一四頁、二二頁）

(13) 安田善四郎「詩碑除幕式の日八木とみ子さん」（『天』二六号、一九七七年、二頁）

（やまがた こずえ／神戸大学文学部卒）